

# 『一心千里』

## 走って見れば、 見えてくる

永田 隆一



第94回

政治経済の世界も芸能スポーツの世界でも、次から次へと新しいニューズが発信される昨今であります。思わず振り向いてしまふ見出しに「どきり」とさせられて、内容に目を走らせてしまします。また、内容を確認するん、そういう事象・結果にいたるまでの原因や経緯に思いを馳せてしまい、時代背景とともに登場人物の心象風景（こころ）へ感情移入してしまつてことがあります。

筆者は、父親の仕事の關係で長崎で生を受けて、2年おきの転校という環境が常態の世界に身を置かれ、幼少・少年時代を過ごしてきました。転校初日の挨拶の緊張、よそ者を食い入るのように見つめるクラスメイトの

好奇心。そっとしておいてほしむという気持ちと、「きつまる」、なんほのものじやい」という反発・反抗心。そして、2年が過ぎるとオールリセ

くのがいやになったぞうです。そして、小学4年生の時に、また都内で転校。クラスに大阪と広島と新潟の転校生が編入されて

## 退屈に耐えるか、不安に耐えるか

## 不安は成功と背中合わせである

が高かった転校に比べたら、ハードルは高いものではなく、変化やチャレンジは楽しむものと考えていたように思います。最近、企業や銀行のM&A担当部署の方や大手投資ファンド、ベンチャーキャピタルの方々との接点が増えてきて、考えさせられることがあります。

工場との取引で生活が成り立っている人たちが大勢いることも忘れてはいけません。100点満点を狙う企業幹部と、50点での満足を狙う社員と地域との戦いが日本全国で繰り広げられています。悲しいことは、こうしたコンフリクトという現実を解決・支援できるグループがないことでもあります。親方日の丸で、地方交付税

主催のシンポジウムに参加しました。Data (オランダ人はデータと発音します) に基づいたオランダのポジショニングを説明し、これからの世界を予見して、オランダとの取引や進出がいかに成長を一緒に享受できるかという説明は魅力満点、高い訴求力でありました。

ツットの転校です。新潟出身の知り合いの女性がいます。本名は千寿子(ちずこ)。小学2年の時に東京へ転校して挨拶、「つづこ」です。先生から「あなたの名前

おり、「今日は方言の勉強をしましょうね。ありがとう、広島では、大阪では、新潟では何と申すでしょう」。そして、つづちゃん

が正解です。収益が上がらない事業を閉鎖して、より成長が期待できる分野へ投資するのであります。

に頼り、借財を重ねて、立派な建物や道路や橋を建設することが正義と注力されてきた自治体は現在、その維持・修繕費に

筆者が25年前に転職したノベラス・システムズの本社CTOはエバート・ファンゲン、日本のCTOはウィルバート・バンデンフック、ともにオランダ人でした。フィリップス社のアルバカーキ研究所からの転職組です。日本の営業責任者の

はちずこさん」と訂正されますが、父母や親戚からずつと「つづこ」と呼ばれてきたので、「先生、違います、私の名前はつづこです」。学校へ行く

職・起業という行動は、幼少期の緊張やストレス

しかし、地方の工場で働く社員の方やその家族の方から観ると、企業存続が望みであり正解です。兼業農家、漁業、林業の親戚を抱え、地域に根を張って幸せに暮らしています。さらに、その

はなりません。もっと大切なこと(教育や外部人材の招聘)への配慮を怠ったツケかもしれない。

「退屈な会社組織には耐えられない。現在の不安は、成功と背中合わせだから耐えることができる。永田さん、ネバーギブアップだ」。御意。(毎月連載)